

児童雑誌『赤い鳥』と『児童世界』の比較研究
一日中の児童出版美術の様態と機能―

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D155222

氏名：李麗

本論文は、20世紀前半の日中児童雑誌における児童出版美術の機能を検討するものである。日中両国の児童文学の黎明期を代表する『赤い鳥』と『児童世界』という二つの児童文芸雑誌を研究対象として、両誌における表紙絵、口絵、挿絵に着目し、その表象、特徴および時代性、読者への機能、編集者が込めた意図などについて考察する。

児童文学にはテキストと絵の共存がよく見られる。とくに、児童雑誌における児童文学作品には読書意欲を掻き立てるために絵や図などが数多く挿入されている。『赤い鳥』と『児童世界』両誌における挿絵は、誌面に添えることによって成立する絵ではあるが、単に文章に従属するものとして挿入されるものではない。両誌は文学の芸術性を追求しただけではなく、挿絵の芸術性にも力を入れて、総合的な芸術性を向上させようとしたことも、一つの可能性として推測できる。先行研究の中では両誌の絵についていずれも触れられているものの、文字と並んで雑誌の全体を支える重要なファクターである絵については十分に検討されてこなかった。

そこで、これまで看過されてきた絵に表現された様々な要素を当時の時代精神、享受層、流行していた風俗など、ビジュアルイメージ（表紙絵、挿絵、口絵）という視点から解読した上で日中児童文学発生期における挿絵の位置付けを探ることを試みる。そのため、本論文は、社会的、歴史的、文化的な文脈とのつながりを探求する図像解釈学を主な方法論として、ビジュアルイメージに対応するテキストの内容を対照させることにより、児童出版美術という視点から雑誌をひとつのメディアとして捉える考察を行う。

本論文は8章から構成されている。

まず、第1章「序論」では、児童文化が誕生した社会背景を説明し、これを背景として創刊された児童文芸雑誌『赤い鳥』と『児童世界』を研究対象として取り上げる理由について説明する。また、『赤い鳥』と『児童世界』に関する研究の現状を紹介し、これらの先行研究を踏まえた上で問題提起を行う。最後に、これらの問題点を考察するための研究方法と、研究の意義について述べる。

第2章では、『赤い鳥』における口絵に描かれた中国のイメージについて論じる。まず、『赤い鳥』の口絵というコラムの特徴とその変遷を確認した上で、写真である口絵に焦点をあて、国別に分類を行う。次に、それらの口絵に描写された中国イメージを考察する。そこから、前期の口絵に登場する中国の仙人から中国へのイメージが肯定的なものから否定的なものになっていく変遷が読み取れる。後期の写真である口絵について、日本は中国を野蛮で未開な国として軽視していることを論じる。日本人が中国の「未開」を強調した背景には、日本が東アジア再構築を先導しようという

動きがあったことが窺える。

第3章では、『児童世界』における口絵に表象される日本のイメージについて論じる。まず、雑誌における口絵の位置付けを考察する必要性を説明した上で、口絵である「世界珍聞」というシリーズの口絵を中心として、そこに登場する口絵を国別に分類する。次に、それらの口絵に描写された日本のイメージを考察する。具体的には、前期の口絵に登場する日本人に関して、日本人の身体の描かれ方が日本の近代化とどのように繋がるのかを検討する。その結果、日本人の近代的な身体的特徴が二つあることを導き出す。また、後期の口絵に関して、中国という場で作られている日本のイメージは敵意識であったことを指摘する。また、戦局が推移するにつれ、日本のイメージは、実力が不足し、神仏に頼るといような〈弱さ〉だけではなく、〈残虐性〉、〈醜悪さ〉をもつものになったことを明らかにする。

第4章では、『赤い鳥』の画家清水良雄と『児童世界』の画家許敦谷に注目し、この二人の絵が西洋美術をどのように受容したのかを考察する。まず、編集者からの評価や読者の感想などから、二人の絵がどのような位置付けであるのかを検討する。次に、ウォルター・クレイン、清水良雄、許敦谷の三人の画風について分析する。それから、清水良雄と許敦谷の絵がクレインの絵とどのような共通性と相違性が認められるのかを確認し、またクレインの絵からいかなる影響を受けたのかを検討する。清水良雄とクレインのアイデアや構図などはよく似ていることを確認し、清水良雄が閲覧した絵本の中にクレインの絵本も含まれていたことを明らかにする。これらのことから、「秘密」の挿絵はクレインの *King Cole* の影響下で描かれたものであることを結論づける。また、許敦谷はクレインの用いた標題やモチーフからヒントを得て描いたものもあれば、画そのものの造形の面を参考にしたものもあることに言及する。

第5章では、両誌の表紙絵について論じる。ここでは特に両誌の表紙絵に描かれた少女の服装や靴、髪型という三つの側面から、分析を行う。まず、少女の服装という視点から見ると、『赤い鳥』に掲載された表紙絵の少女たちは、近代女性の新たな側面としての服飾の有様を捉えている。一方で、『児童世界』の表紙絵における少女たちが洋服を着用することは、〈伝統〉と急変する新しい文化現象との狭間にあって、その時代を生きた人々の欲望と後悔が入り混じる心情が読み取れることを明らかにする。次に、少女の靴という側面から見ると、『赤い鳥』の読者である少女たちのファッションへの憧れが表れているしことを指摘する。それに対して、『児童世界』の表紙絵には、社会規範の変動のなかで、女性が新文化運動の思潮に乗り、社会的な地位を獲得するようになったことで、表紙絵を通して、読者である少女たちに自主独立

の人格という新しい思想を吹き込んだことが明らかになる。最後に、髪型という側面から見ると、『赤い鳥』の表紙絵に描かれた断髪した少女たちはそのモデルとなって、個性的な美、健康美といった新しい価値観を読者の少女たちに伝えたことを明らかにする。その一方、『児童世界』では、断髪という表現を通して、ただ外面的に男性を模倣するにとどまらず、男女同権を提唱し、男女平等を要求するといった自立した女性の新しい価値観を読者の少女たちに伝えたのである。

第6章では、両誌に掲載された短編童話である *Den lille pige med svovlstikkerne* (マッチ売りの少女) の翻訳を取り上げて挿絵の意味を検討する。まず、「マッチ売りの少女」の挿絵を研究する必要性について述べる。それから、挿絵の定義を紹介し、この定義を土台とした挿絵の分類を行う。次に、『赤い鳥』に掲載された「マッチ賣の娘」と『児童世界』に掲載された「賣火柴的女孩」において挿絵の視覚的効果と意味を考察する。『赤い鳥』に掲載された「マッチ賣の娘」における連続的に画面が展開していく4枚の挿絵は時間の流れを表現しており、映像と同じように視点の移動や場面転換によって子どもである読者の視線を誘導する効果があることを指摘する。また、文字が読めない小さい子どもにとってストーリーの展開を読み取ることは難しいため、『児童世界』における唯一の挿絵は、テキストの内容を補助する機能を果たす。テキストによって語られない情報を挿絵によって補足させる役割を持たせることで、言葉で語られることと絵で語られることをそれぞれが意識し、表現の特性を引き出していることに言及する。

第7章では、両誌に掲載された長編童話である *Alice's Adventures in Wonderland* (不思議の国のアリス) を取り上げて、挿絵の機能を論じる。『赤い鳥』の「地中の世界」に掲載されたカットの機能は、美術の一形式として、享受者である子どもの美術感覚に訴えかけるだけではなく、物語のキャラクターを提示するとともに、読者である子どもに対して物語への糸口を開くことができたことを指摘する。それに対して、『児童世界』の「阿麗斯夢遊奇境記」のコマ絵は挿画のように本文の内容を説明する機能を持たず、描き手たちが思い切って想像力を自由に発揮できるスペースを提供する役割を果たしている。次に、内容と関係がある挿絵について、『赤い鳥』に連載された「地中の世界」では、ほとんどの見開きの挿絵に主人公が登場しており、これらの見開き絵は、右から左に流れるように展開し、遠近法で描写されたものである。一方、『児童世界』の「阿麗斯夢遊奇境記」では、挿絵に文字を付け加えられ、読者は物語の一場面としての単一の絵と絵に添えられている一文を利用し、自分の想像力で物語の流れの連想を完成させることができたことを明らかにする。

第8章では、本論全体を総括した上で、総合的考察を加え、今後の研究課題を提示

し、研究の展望について述べる。

以上の各章を通して、児童雑誌における口絵、表紙絵、挿絵などといった児童出版美術の意味、機能について考察する。児童雑誌は文化性と商品性という両義性を備えている。したがって、児童雑誌は、表紙絵、口絵、挿絵といった児童出版美術との関わりに力を入れて、それを活かし、芸術性を備えた商品として、購読者を獲得していたと考えられる。そして、社会的な存在としての児童雑誌における児童出版美術が児童文化の歴史の中に芸術表現のジャンルの一つとして位置付けられることにより、児童雑誌と社会、経済、文化とのつながりがはっきりと生かす、児童雑誌、さらには児童文化の全体像把握に深く寄与したのである。